

マリアの子ども

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

ある大きな森のまえに、ひとりの木こりが、おかみさんといっしょに住んでいました。

子どもは、三つになる女の子がたつたひとりしかありませんでした。

木こり夫婦ふうふはたいへん貧乏びんぼうで、その日その日のパンもなく、子どもになにを食べさせたらよいか、とほうにくれるほどでした。

ある朝、木こりは心配しんぱいごとに胸むねをいためながら、森へしごとにでかけました。木こりが森のなかで木を切っていますと、ふいに、背せの高い美しい女の子が目めのまえにあらわれました。みれば、女の子はぴかぴかがやく星のかんむりを頭にいただいています。女の子は、木こりにむかっています。

「あたしは聖母せいぼマリア、幼子おきなごキリストの母です。おまえは貧乏びんぼうで、その日のものにもこまっていますね。あたしのところへおまえの子どもをつれていらっしやい。あたしがその子をつれていって、めんどろをみてあげましょう。」

木こりはいわれたとおり、子どもをつれてきて、聖母マリアにわたしました。マリアはその子をつれて、天国てんごくにのぼっていききました。子どもはたいへんしあわせでした。さとうのはいったパンを食べたり、あまいミルクをのんだりしました。そして、金きんの着物きものをき

て、かわいい天使たちといっしよにあそびました。

やがて、この子が十四になったときのことです。ある日、聖母マリアがこの子をよびよせて、いいました。

「あのね、あたしはこれから長い旅にでます。それで、おまえにこの天国の十三の扉のかがぎをあずけておきます。このうちの十二の扉はあけて、なかにあるりっぱなものを見てもいいですよ。でも、十三ばんめの扉は、この小さなかがぎで、あくことはあきますけど、でもあけてはいけません。よく注意して、あけないようにするんですよ。さもないと、おまえはふしあわせになりますからね。」

女の子は、きつといいつけをまもります、と約束しました。

やがて、聖母マリアが旅にでてしまいますと、女の子は天国の住まいの見物をはじめました。まい日ひとつづつ扉をあけているうちに、いつのまにか、十二ばんめの住まいまですっかり見てしまいました。

どの住まいにも（1）使徒がひとりずついて、大きなみ光につつまれていました。女の子は、ひかりかがやくあたりのすばらしいようすを見て、大よろこびでした。かわいい天使たちも、いつも女の子のあとについていって、女の子といっしよに、うれしがっていま

した。

こうして、あとには、いよいよ、あけてはいけないといわれている扉とびらが、ひとつのこっているだけになりました。女の子は、そこになにかかくされているのか、知りたくてなりません。それで、小さい天使てんしたちにむかっていいました。

「あたし、みんなはあけないし、それに、なかへはいつたりもしないわ。ただ、そつとあけて、ちよつとすきまからのぞいてみたいの。」

「まあ、いけないわ。」

と、小さな天使たちはいいました。

「それはよくないことよ。だって、聖母せいぼマリアさまがそんなことをしてはいけないつておつしやつたんですもの。それに、あなたはふしあわせなめにおあいになるかもしれないわ。つてよ。」

そういわれて、女の子はだまっていきましたが、心のなかの見たいという気持ちだけは、すこしもかわりませんでした。それどころか、もういつときもおちついていないほど、見たくて見たくてたまらなくなっていたのです。

あるとき、小さな天使たちがみんなでかけてしまったあとで、女の子は、

(いまならあたしひとりだから、のぞいて見たってかまやしない。あたしが見たってことは、だれにもわかりやしないんだもの。)
と、考えました。

女の子はその扉とびらのかぎをえらびだしますと、それを手にとつて、錠じょうにさしました。そして、さしこんだかぎをぐつとまわしました。すると、扉とびらがぱつとあきました。とたんに、
(2) 三位さんみ一体いつたいの神かみさまの、火とみ光ひかりにつつまれているすがたが、女の子の目にうつりました。

女の子はびつくりして、しばらくのあいだは、ぼんやりつつ立ったまま、ながめていました。けれども、やがて、そのみ光ひかりに指をちよつとふれてみました。すると、その指がすつかり金色きんいろになってしまいました。と、きゆうに、女の子は、なんだかとてもこわくなつて、扉とびらをかたくしめるがはいか、あわててにげしました。

ところが、それからというものは、女の子はどんなことをしてみても、なんとなくこわくてたまらないのです。胸むねはしよつちゆうどきどきして、ちつともしずまることがありません。それに、指さきについた金色は、どんなにあらってみても、こすってみても、さつぱりおちないのです。

それからまもなくして、聖母せいぼマリアは旅たびからかえってきました。マリアは女の子をよんで、天国てんごくのかぎをかえすようにいいました。女の子がかぎたばをさしますと、マリアは女の子の目をじつと見つめて、いいました。

「十三ばんめの扉とびらはあけなかつたでしょうね。」

「はい。」

と、女の子はこたえました。

マリアが女の子の胸むねに手をあててみますと、心臓しんぞうがどきどきうっています。それで、マリアには、女の子がいつつけをやぶつて、扉とびらをあけたことが、わかりました。そこでもういちど、マリアは、

「きつとあけなかつたのね。」

と、いいました。

「はい。」

と、女の子ももういちどこたえました。

そのとき、マリアは、天国てんごくの光にさわつたため金色きんいろになつてゐる女の子の指さきを見て、やっぱりこの子がいつつけをまもらなかつたことを、はつきりと知りました。

そこで、さらにもういちど、

「ほんとうにあけなかつたのね。」

と、念ねんをおしました。

「はい。」

と、女の子は三度めもこたえました。

すると、マリアは、

「おまえは、あたしのいいつけをきかなかつたばかりか、うそまでもいいましたね。おまえは、もう天国にいる資格しかくがありません。」

と、いいました。

それから、女の子はぐつすりねむりました。ところが目がさめてみますと、どうでしょう。いつのまにかじぶんは下界げかいにおいて、荒れ野あのまんまんなかにねているではありませんか。

女の子は大声をあげてさげぼうとしましたが、どうしたものか、うんともすんともいうことができません。女の子ははねおきて、かけだそうとしました。ところが、どっちをむいても、いちめんイバラがおいしげっていて、ゆくてをさえぎっているではありません

か。これでは、とてもつきぬけることはできません。

女の子がとじこめられてしまったこの荒れ野には、うろのある一本の古い木がありました。女の子は、ここをすみかにするよりほかしかたがありません。夜になると、そのなかにもぐりこんで、ねむりました。それから、嵐や雨のときには、このなかにかくれていました。といつても、これはみじめなくらしでした。ですから、天国のたのしかったことや、かわいらしい天使たちとあそんだことを思い出しますと、そのたびに、女の子はさめざめと泣くのでした。

食べ物といえ、木の根や草の実があるばかりです。女の子はそれを、歩けるだけ遠くまで歩いていつては、さがしまわりました。秋には地面におちたクルミや木の葉をあつめて、うろのなかにはこびこみました。クルミは冬のあいだの食べものなのです。

やがて、雪と氷にとぎされるようになりますと、女の子はあわれなけものみたいに、木の葉のあいだにもぐりこんで、こごえないようにしました。そのうちに、きている着物がぼろぼろになって、すこしずつからだからちぎれおちました。

やがてまた、お日さまがあたたかにてりはじめますと、女の子はすぐにそとへでて、その木のまえにすわりました。長い髪の毛は、女の子のからだを、マントのように、すっぽ

りとくるんでいました。

こうして、一年また一年とたつていきました。女の子は世のなかのつらさ、なさけなさを、しみじみとあじわいました。

木ぎが、ふたたびみずみずしい若葉わかばをつけはじめたころのことでした。あるとき、この国の王さまが、森で狩かりをして、シカを追おつていきました。ところが、シカは森をかこんでいるやぶのなかににげこんでしまいました。そこで、王さまは馬からおりて、しげみをおしわけおしわけ、つるぎで道をきりひらいてすすんでいきました。

こうして、やつとのこととそこをつきぬけていきますと、あの木の下に、目もさめるような美しいむすめがすわっているではありませんか。むすめはからだじゅう足のつまさきまで、金色きんいろの髪かみの毛けですつかりつつまれています。王さまはじつと立ちどまって、びつくりしてむすめの顔を見つめていましたが、やがてむすめに話しかけて、

「おまえはだれだね。どうしてこんな荒れ野あのなかにいるのだね。」
と、たずねました。

けれども、むすめはなんにもへんじをしませんでした。だって、口をひらくことができないのですもの。王さまはなおもことばをつづけて、

「わしといっしょに城へこないかね。」
と、いいました。

するとむすめは、ほんのちよつとうなずいてみせました。

そこで、王さまはむすめをだきあげて、じぶんの馬にのせ、お城へむかって馬をすすませてくださいました。

お城へかえりますと、むすめは王さまから美しい着物をはじめ、いろんなものをたくさんいただきました。むすめは口こそきくことはできませんでしたが、たいそう美しくて、かわいらしいので、王さまは心のそこからこのむすめがすきになりました。そしてまもなく、むすめと婚禮の式をあげました。

一年ばかりたつたとき、お妃さまは男の子を生みました。ある晩のこと、お妃さまがひとり寝床にねていますと、聖母マリアがすがたをあらわして、こういいました。

「おまえがほんとうのことをいって、いけないといわれていた扉をあけたことを白状すれば、おまえの口がひらいて、もとのように話すことができるようにしてあげましょう。でも、おまえが罪をあらためないで、いつまでもがんこにうそをいいはるのなら、この赤ちゃんをつれていってしまいますよ。」

このとき、お妃さまはへんじをするために、口をきくことができるようになりました。けれども、あいかわらず強情をはって、

「いいえ、いけないといわれた扉はあけはいたしませんでした。」
と、こたえました。

すると、聖母マリアは、生まれたばかりの赤ちゃんをお妃さまの腕からとって、子どもといっしょにきえてしまいました。

あくる朝、赤ちゃんのすがたがどこにも見えませんので、だれいうとなく、お妃さまは人食い鬼だ、じぶんの子どもを殺してしまったのだ、といううわさをしはじめました。お妃さまもそれをのこらずききましたが、といって、それに反対することもできません。もつとも王さまは、お妃さまが心からすきでしたので、そんなことばには耳をもかさうとはしませんでした。

一年たって、お妃さまはまた男の子を生みました。その晩、聖母マリアがまたもお妃さまのところへあらわれて、いいました。

「おまえが、いけないといわれていた扉をあけたことを白状すれば、赤ちゃんもかえしてあげますし、舌もうごくようにしてあげましょう。けれども、おまえが罪をくいあら

ためないで、あいかわらずうそをいいはるのなら、この赤ちゃんもつれていってしまいますよ。」

ところが、お妃さまはこんども、

「いいえ、とめられておりました扉は、あけはいたしませんでした。」
と、いいました。

すると、マリアはお妃さまの腕うでから赤ちゃんをとつて、天国てんごくへつれていってしまいました。

あくる朝、またまた赤ちゃんのすがたが見えませんでした、みんなは、お妃さまきさまがのんでしまったのだと、大声にいいたてました。王さまのご相談役そうだんやくの人たちは、お妃さまを裁さ判いはんにかけるように、と、もうしたてました。

けれども、王さまはお妃さまがかわいくてなりませんので、そんなことは頭しんから信用ようしようとはしませんでした。そして、ご相談役の人たちに、こんご二度とそんなことをもうすと、死刑しけいにいたすぞ、ときびしくいいわたしました。

そのつぎの年、お妃さまは美しい女の子を生みました。と、その晩ばん、またしても聖母せいぼマリアがあらわれて、

「あたしのあとについておいで。」
と、いいました。

マリアはお妃さまきさきさまの手をとって、天国てんごくにつれていき、お妃さまに上のふたりの子どもを見せてやりました。ふたりは、地球ちきゅうをおもちやにしてあそんでいましたが、お妃さまを見ると、にっこりわらいました。お妃さまがそのすがたを見てよろこんでおりますと、聖母マリアがいいました。

「おまえの心は、まだとけないの。おまえが、いけないといわれていた扉とびらをあけたと白状はくじょうしさえすれば、ふたりのぼうやはかえしてあげるんですよ。」

ところがお妃さまは、

「いいえ、いけないといわれておりました扉とびらは、あけはいたしませんでした。」
と、三度めもこたえてしまいました。

そこでマリアは、お妃さまをふたたび地ちじょう上じやうにおろして、三ばんめの赤ちゃんもとりあげてしまったのです。

あくる朝になつて、このことが知れわたりますと、だれもかれもが、
「お妃さまは人食ひとくい鬼おにだ。裁判さいばんにかけろ。」

と、口ぐちにさけびたてました。

こうなつては、さすがの王さまも、もうご相談役の人たちをはねつけるわけにはいきません。こうして、裁判がひらかれました。しかし、お妃さまはへんじをすることもできませんし、いいわけをすることもできません。そこで、とうとう、火あぶりの刑にきまつてしまいました。

そこで、まきがはこびこまれました。いよいよ、お妃さまは柱にしぼりつけられました。やがて、そのまわりじゆうに火がもえだしました。そのとき、お妃さまの胸のなかにすくっていた思いあがりのあつい氷がとけて、お妃さまは心のそこから後悔しました。そして、

(せめて死ぬまえに、あたしが扉をあけましたと白状することができたら、どんなにうれしいかしれない。)
と、思いました。

すると、きゆうに声がでるようになりました。お妃さまは大声にさけびました。

「ああ、マリアさま、あたしが扉をあけました。」

と、どうでしょう、そのとたんに、雨がざあざあふりだして、たちまちほのおをけして

しまったではありませんか。お妃さまの頭の上に、ひとすじの光がさしたかと思うと、聖母マリアが地上におりてきました。マリアは、ふたりの男の子を両わきにつれ、生まれたびかりの赤ちゃんを腕にだいています。マリアはお妃さまにむかってやさしく、

「じぶんの罪をくいて懺悔をするものは、ゆるされるのですよ。」
と、いいながら、三人の子どもをわたして、お妃さまの舌をうごくようにしてくれました。しかもそればかりか、お妃さまに一生のしあわせをもさずけてくださったのです。

(1) 使徒というのは、イエス・キリストが教えをひろめるためにえらんだ十二人の弟子のことです。

(2) 三位一体というのは、キリスト教で、父である天の神と、子であるキリストと、聖霊の三つはもともと一体であるという教理です。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集(1)」偕成社文庫、偕成社

1980 (昭和55) 年6月1刷

2009 (平成21) 年6月49刷

入力：sogo

校正：チエコ

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

マリアの子ども

グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>